

旧厚見郡下佐波村 安政6年(1859)の御鋤祭りの史料を読もう

1 今回読む史料について

青木久太郎家文書は、元文4年(1739)から明治初年まで、厚見郡下佐波村(岐阜市佐波)の庄屋を務めた青木家に伝えられた文書群で、岐阜県歴史資料館に収蔵されている。

本講座では、同文書の「天保十一年 子三月改 一番歳々諸事村用書留帳 青木久兵衛扣」より、安政6年3月9日の御鋤祭りの記事をテキストとする。「一番歳々諸事村用書留帳」は、幕末から明治の青木家の当主が村政の重要事項や村の出来事・事件を主としながら、家業や家族にかかる事項も含めて、原則編年順に書き留めたもので、天保11年(1840)に帳面を作成し、文久3年7月の記事が最後である。これに続く「二番歳々諸事村用留帳」には、その後明治21年(1888)までの出来事が記されている。

2 御鋤祭りについて

尾張・美濃・飛騨・三河・遠江など中部・東海地方で、17世紀以後壬戌(みずのえいぬ・じんじゅつ)・丁亥(ひのとい・ていがい)の年に流行した五穀豊穰を祈る祭。御鋤踊りともいう。御鋤祭りの史料の初見は1631年(寛永8 辛未)で(『武蔵国足立郡上尾鋤太神略由来』)、以後、1682年(天和2 壬戌)、1703年(元禄16 癸未)、1742年(寛保2 壬戌)、1767年(明和4 丁亥)、1802年(享和2 壬戌)、1827年(文政10 丁亥)、1859年(安政6)、1862年(文久2 壬戌)、1881年(明治14 辛巳)、1888年(明治21 戊子)、1947年(昭和22 丁亥)の流行が知られている(注1)。

祭は、志摩の伊雑宮(三重県志摩市磯部町)、文政からは伊勢神宮(同伊勢市)の外宮の御師から送られた木製の小型の鋤を神輿に納め、村送りに送られ、鋤は最後は村の神社の小祠に納められるのが例であった。

1827年(文政10)の尾張清洲の例では、病人以外の村民全員が参加し、車行司を先頭に、大鉢、太幟(5間余りのもの二本)、獅子、神輿(4人に担がれる神明造の神輿)などの祭礼行列の後に、子供連39人、女のはかた、若者の花踊り、俄狂言が続いた。

御鋤祭りは1月から4月までの春になされることが多く、五穀豊穰を祈年する祈年祭としての性格が認められる。この祭は明和までは志摩の伊雑宮に村人が鋤をいただきにいったが、文政になると伊勢神宮の外宮の御師が村に祭の実行を求めるように変化してきた。<以下略> (西垣晴次「御鋤祭」『日本民俗大辞典 上巻』吉川弘文館 一部改変)

注1: おおよそ60年周期で流行したが、下線部と網掛け部の二通りの周期があった。

3 史料の語句解説

佐波三ヶ村 上佐波村、中佐波村、下佐波村のこと。下佐波村は延享3年(1746)以降、北組(北屋敷、山、川原)と南組(坂巻、領毛)に分かれ、それぞれに庄屋

が置かれていたが、祭礼や雨乞い等の共同祈願の行事は、下佐波村全体で引き続き行った。青木家は北屋敷の八幡神社の南東に隣接していた。明治5年(1872)に3ヶ村が合併し佐波村となる。

てうさい 意味未詳（「祝い」、「祝祭」の意か）。

華火 幕末には「東濃の村技（村芝居）、西濃の煙火」と称されるほど、美濃地方西部の村々では競って花火の製造と打ち上げに興じた。岐阜県は明治3年(1870)以降これを禁止したが、強い再開要求により同13年に解禁。各地で盛んに花火大会が行われた。

巻旗揚げる 「意気込みを持って新しく事業を興す」「成功を目指して新事業を起こす」の意。

にわか 俄芝居のこと。江戸時代から明治時代にかけて、宴席や路上などで行われた即興の芝居。

役家 村役人の家。

八幡宮 旧下佐波村には、下佐波の八幡宮、領毛の八幡宮、坂巻の神明宮、須原宮があった。下佐波の八幡宮は、古来佐波三郷（上佐波、中佐波、下佐波）の総社として信仰され、総（惣）社八幡宮と呼ばれた。

渡り物 祭礼の時などに練り行く踊屋台・仮装行列、山車の類（広辞苑）。「練り物」に同じ。

警固 非常の事態に備え、注意して守り固めること。またその人。

船場 船着き場

石川 坂巻集落東端辺りの境川堤。ここには坎樋（堤内地に溜まった悪水を河川に吐き出すために堤防を横切るように埋め込まれた樋）が設置されており、「石川坎」と通称されていた。同所には現在も石川樋門が設置されている。

船場 船着き場

山西 山組の西あたりの地域

ぼんてん（梵天） 御幣、幣束のこと。裂いた麻や畳んで切った和紙を竹や木の棒の先の切り込みに挟んで垂らしたもので、祭礼や祈祷などに用いる。

鍬山大神宮 御鍬神のこと。伊勢外宮から出される鍬形は、同社の裏山の鍬山の榊で製作されるため、鍬山様とも呼ばれた。下佐波の総社八幡宮には境内社として鍬宮社が祀られている。青木文書では、「御鍬様」と通称している。

小袴 上括り（袴の裾を膝の下で括る）にするために、特に裾を短くして括り緒を入れた袴。

割羽織（さきばおり） 武士が乗馬や旅行などに用いた羽織。背縫いの下半分が割れ、帯刀に便利。「ぶっさき羽織」、「背割り羽織」ともいう。

タチツケ タツツケ袴、カルサン袴のこと。膝より上は筒太く、ひざ下部分は細く脚絆を縫い付けたような形状になっている。軽快な立ち振る舞いに適するため、武士の旅装、やがて職人や芸能の役者など民間にも広がった。

帯刀・一刀 帯刀は太刀と脇差2本、一刀は1本指すこと。